

目次

午前3時自室にて	9
帰り道	16
触れたい衝動	23
中華団欒	28
・	41
天井のシミ	48
隠れ家	55
緊縛スル願望	65

緊縛スル願望

「世界が、アナタと私の二人だけで、出来ていれば、良かったのにね」
そのセリフで、土方はどうとう泣いてしまった。もうその大分前からヤバイなどは感じていたのだ。だが、恋愛映画を見てなくわけにはいくまいと堪えていたのに。
だが涙は止まらなかった。スクリーンの中では、男と女が口付けを交わしている。強く抱き合っ
たまま。

ちらりと脳裏に好きな人の笑顔が浮かんだ。
ところが、とたん、涙は引いていった。

帰り道、赤い目をした土方は、助手席に座り、黙って窓の外を見ている。
運転をしている原田は、まだ鼻をすすりながら、しきりに今日の内容を繰り返した。

「身分違いっつーのが切ないんですよ」

そう原田は言って、ヒロインの名を呼ぶ。

土方もそれには同感だと思った。

映画の主人公は、ヒロインである旧家のお嬢様宅で働いている下男だ。主に馬の世話をしている。ヒロインは馬が好きで、幼い頃から馬小屋にはしょっちゅう遊びに来ていた。歳の近い二人だったから、そうするうちに自然と仲良くなつて、年頃になった時、二人の間には恋心が芽生えていた。

そうしていつしか二人は深い仲になる。誰にも内緒で、こっそりとお互いを求め合う。

そういう、言わば、よくあるストーリーだった。それでも人気と感動を読んだのは狂気すれすれまで追い込まれた男の情愛と、明るくて純なヒロインに見え隠れする陰のためだろう。と、土方は思う。

特に、女優の演技は素晴らしかった。明るくて憂いなんて何一つ無いような顔をしている金持ちのお嬢さんが、ふと見せる寂しさ。

それを考えた時に、土方の胸はチクリと痛んだ。憂いなんて何一つないような顔をしている人に本当に憂いが無いとは限らない。それを、土方は、よく知っている。

「お嬢さんのあの寂しげな笑顔とか見たらもう俺泣けちゃって」

原田はそう言って、ハンドルを切った。車が乱暴に左折して、土方は驚き原田の方を見る。
「危ねーだろーが」

「いや、興奮しちまってスンマセン」

原田は笑って手を頭にやった。まったく反省してないな。と、土方は思い、「まったくアメエは」と小さく呟くと煙草を取り出し銜えた。

「・・・副長、さつきから妙な顔してますぞ」

「ア？なんだよ原田。殴られてえのか？」

煙草に火をつけて、土方は、原田を睨みつける。